

東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題(和文): 明治後期における報道表現の変容

研究課題(英文): Transformation of Modes of Expression in the Late-Meiji-Period News Reporting

申請者名・所属先: 前島志保 ・ 総合文化研究科

海外招聘者名: なし

1. 研究の目的

本研究は、日本初の時事的な画報誌である『近事画報』（1903年に『東洋画報』として創刊）の報道表現に焦点を当て、従来等閑視されてきた明治後期日本における報道表現（なかでも視覚的な報道表現）の変容の一端について考察することを目的とする。同時に、『近事画報』（含『東洋画報』『戦時画報』）のデジタル復刻版刊行を行い、この時期の出版物を用いた様々な研究に資することも目指す。

2. 研究開始当初の背景

明治後期の日本では、日清戦争・日露戦争等の大事件から足尾銅山鉍毒事件や都市貧民街の様子のような社会問題に至るまで、新聞・雑誌により様々な事柄が報道された。この時代は、取材に基づく報道記事（「探訪記事」）が注目を浴びはじめた頃であり、また、報道で用いられる文章表現・視覚表現にも大きな変化が見られた時期でもあった。言文一致体の模索と完成に伴い、報道記事に口語体が徐々に取り入れられ、取材対象者の話の引用の挿入も増えていった。印刷技術の発展により、日清戦争勃発の少し前から取材先でのスケッチの挿入が行われだし、日露戦争前後からは写真画像による報道も始まり、視覚表象による報道を主眼とする画報誌も登場した。報道をめぐるこれらの変化は、人々の「現実」に対する感覚の変容をも伴うものだったと推察される。

しかしながら、明治後期の報道の表現様式の変容は、これまではあまりまとまった形で研究されてこなかった。戦争・災害・貧困など個々のテーマに関しては文学あるいは歴史社会学の分野における言説分析や表象研究があるが、報道表現自体に焦点を当てた考察は立ち遅れている。なかでも、視覚表現を用いた出版物やそこにおける報道表現の研究は、1923年『アサヒグラフ』創刊以降（とりわけ太平洋戦争期）に集中しており、それ以前の状況については不明な点が多い。

そこで、本研究は、科学研究費（挑戦的研究）を得て行った研究成果のうち、ヨーロッパ日本研究協会第16回大会（The 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies/EAJIS、2021年8月）での研究発表“Shifting Realisms in Japanese Journalism at the Turn of the Century: Focusing on Pictorial Magazines around the Russo-Japanese War”を発展させ、日本初の時事的な画報誌として1903年に創刊された『近事画報』類（以下『近事画報』）に焦点を当て、従来等閑視されてきた明治後期日本の定期刊行物における報道表現（特に視覚的な報道表現）の変容について考察する。この類の研究が立ち遅れている要因の一つとして、資料へのアクセスの難しさが考えられる。よって、本研究では、この問題を少しでも解消するために、『近事画報』のデジタル復刻版刊行も目指す。

なお、申請者は、これまで、出版・読書文化の大衆化において戦間期の人気婦人雑誌が果たした役割を考察することを通して近代日本の出版史を再考する作業を行ってきたが、このなかで、婦人雑誌が報道



表現の大衆化とも密接な関係を持っていたことに気付いた。本研究は、この気付きの延長線上にある。

3. 研究の方法

研究対象となる『近事画報』類が複数の図書館・資料館に散在しているため、まずこれらの画像データの収集と整理を行った。文生書院の協力のもと、国立国会図書館、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター 明治新聞雑誌文庫、東京大学総合図書館、日本近代文学館、奈良大学などにあたり、『近事画報』類、すなわち、『東洋画報』（1903年3月1日―8月1日）、『近事画報』（1903年9月1日―1904年2月1日）、『戦時画報』（1904年2月21日―1905年10月1日）、『近事画報』（1905年10月10日―1907年3月15日）の画像データ収集を行い、RAの助けを借りデータを整理した。このデータをもとに『近事画報』類（以下『近事画報』）の「絵画」「読物」欄の報道表現、とりわけ視覚表現に焦点を当て、分析と考察を行った。並行して、若手・中堅研究者とともに画報誌研究会（非公開）を数か月に一度開催し、明治後期から大正期にかけての様々な出版物（特に新聞と他の画報誌）における報道表現への知見を深めた。これにより、『近事画報』の報道表現を同時代の出版事情の文脈の中で考察することが可能となった。

4. 研究成果

【概要】

これまでの関連研究では、日露戦争期の報道における新聞・画報誌への写真画像の本格的導入への言及はあったものの、その導入の実態については詳しい考察は行われてこなかった。換言するならば、実際にはどのような形でどの程度写真画像が採り入れられていたのか、写真画像の導入は視覚的な報道の従来の慣習をどの程度変容させたのか、また逆に、従来の視覚的な報道の慣習のうち変化を受けなかったものは何だったのかなどの諸点に関しては、具体的な調査・研究が行われてこなかった。

本研究では、日露戦争の戦前から戦後にかけて刊行されていた日本初の時事的画報誌『近事画報』の視覚的な報道表現に焦点を当てることで、定期刊行物の報道への写真の導入期の実態の一端を明らかにすることができた。すなわち、従来は日露戦争期の報道に写真画像が用いられたことが強調されがちだったが、実際には、新聞・画報誌の報道への写真画像の採り入れが始まったとはいえ、依然として新聞における報道は専ら文字で行われ、報道に用いられる視覚表現は新聞・画報誌ともに主として絵であったことが確認できた。『近事画報』の場合は、戦争によって報道の正確さへの注目が高まるとともに写真への期待も増したものの、当時の写真をめぐる様々な限界から絵画も重要な表現として維持された。そこでは、戦地の様子をできるだけ正確に生き生きと伝えるための演出上の工夫が色々と施されていた。また、文章（キャプション）の調子と絵の内容の微妙なズレを用いた、巧みな当局批判も見られた。戦時期に施された視覚表現上の工夫は戦後の報道表現にも引き継がれたが、視覚表現による報道自体への世間的な関心は維持されなかったことも本研究を通して確認することができた。『近事画報』における視覚的な報道表現の特徴については、以下の第91回HMCオープンセミナーの概要を参照されたい。

成果の一部は、二度のヒューマニティーズセンターオープンセミナー（第56回2022年3月4日、第91回2023年4月14日）、およびメディア史研究会における口頭発表によって公表した。今後、HMCブックレットと『近事画報』の解説付きデジタル復刻版の刊行も予定している。OCR（光学文字認識）を用いたデジタルカラー復刻版『近事画報』の刊行は、歴史学、文学、美術史、写真史、思想史など多くの



分野の研究に貢献することが期待される。2023年度刊行予定の単著の第四部には本研究の成果の一部が収められる見込みである。

また、画報誌研究会における活動を通して、従来の研究では日露戦争を機に出版物における言説・表象が画一的な方向に変化したと言われてきたが、実際にはかなりの多様性が含まれており、報道の表現同様、戦争を境として一変したわけではなかったことも判明した。本研究および画報誌研究会の活動を通して明らかになった事柄をさらに深く追求するために、科学研究費基盤研究（B）に応募、研究課題「明治後期雑誌における言説・表象・表現のメディア横断的再検討：貫日露戦の視点から」が採択された（2023年度～2028年度）。今後は、今回十分に行うことができなかった『近事画報』における報道的な文章表現の分析を行うとともに、『近事画報』以外の画報誌・一般雑誌・新聞の報道における視覚表現・文章表現、および当時の受け手（読者）の反応に関する調査と考察を進め、近代的な報道表現成立の様相の解明に努めていきたいと考えている。

・第56回 HMC オープンセミナー（2022年3月4日、オンライン開催）

「『見る雑誌』の誕生——近代日本における雑誌写真の展開と『主婦之友』の写真表現」(Birth of the "Visual Magazine": Photographic Expression in *Shufu no tomo* (Housewife's Friend) and the Use of Photography in Modern Japanese Magazines) (『近事画報』の誌面データを収集・整理している間に、本研究の前提となった研究について発表したもの)

概要：従来の研究では、グラフ誌以外の一般の雑誌の視覚化（「見る雑誌」化）は第二次世界大戦後の『平凡』などの娯楽雑誌からとされてきた。しかし、戦前の雑誌を子細に調査してみると、その動きは実はそれよりも早くから大衆向けの婦人雑誌において始まり、大衆雑誌に、さらには戦時中の『写真週報』にも及んでいたことが判明した。「見る雑誌」への動きは、大手新聞社とほぼ同じ時期に写真部を創設し、他の雑誌社に先駆けスタジオを設け、社独自の写真画像の誌面への採り入れを1920年代より積極的に行っていた『主婦之友』により推し進められていた。

本発表では、各種雑誌の誌面、社史、編集者の自伝などを精査し、明治末期以降の雑誌写真表現と雑誌における写真の位置付けを概観したうえで、『主婦之友』がそれらをどのように変容させたのかということを紹介した。具体的には、『主婦之友』は口絵写真を独立したコンテンツとして成立させ、口絵欄を拡大し「画報」と呼ばれる目玉企画にまで発展させるとともに、本文欄にも写真画像を積極的に採り入れ、口絵と本文から成るそれまでの雑誌の二部構造に揺さぶりをかけ、「見る雑誌」に誌面を変容させていた。さらに、そこで頻繁に用いられていた写真記事の表現様式は、写真画像・レイアウト・文章表現ともに臨場感を強める方向に変化していたこと、またそれは、同誌画報欄の改革に取り組んでいた社長・石川武美と写真部長・安河内治一郎が持っていた「現実の再現」を志向する写真観、および動画への強い関心に下支えされていたこと、とりわけ力を入れられていたのが報道的な写真記事であったことを指摘した。

・第91回 HMC オープンセミナー（2023年4月14日、オンライン開催）

「『リアリティ』の変容／不変容——明治末期定期刊行物における報道への写真の導入」(Changing/Unchanging "Reality": The Introduction of Photographic Images into News Reports in Late Meiji Periodicals)

概要：これまでの研究では日露戦争期の報道で写真画像が用いられたことが強調されがちだったが、実



際には、新聞・画報誌の報道への写真画像の採り入れが始まったとはいえ、依然として新聞における報道は専ら文字で行われ、報道に用いられる視覚表現は新聞・画報誌ともに主として絵であったことが確認できた。矢野龍溪が顧問的な存在として関わり、国木田独歩（哲夫）が編集長として携わったことでも知られる『近事画報』（戦時中は『戦時画報』）も例外ではなく、戦前はもちろん、開戦当初においても、力が入れられていたのは画家の特派員としての現地派遣であった。

ところが、戦争が進むにつれ報道の即時性と正確さを追求する編集部姿勢が強まり、写真師および写真への期待が増していく。写真画像の持つ現実に対する指標性と類似性への関心が強まったと言える。しかしながら、検閲や技術的な問題により写真画像による報道には限界があり、絵画による報道の重要性は依然として続いた。視覚的報道における写真画像と絵画の使い分け、正確さの点における絵画の限界を補うキャプション上の工夫、臨場感を出すための前線の特派員および誌友（兵士）からの投稿の活用なども行われていた。文章（キャプション）の調子と絵の内容の微妙なズレを用いて、巧みな当局批判もなされていた。戦後は、写真画像の限界は解消されなかったものの、報道の視覚表現において正確さを追求する傾向は残った。他方で、視覚表現による即時的報道への要求は続かず、『近事画報』含め時事的な画報誌は全て戦後ほどなく廃刊となった。すなわち、報道的な視覚表現は特別な大きな事件が起きた際のみに出回る「際物」であるという、近世以来の慣習は変化しなかったと言える。

5. 主な発表論文等

〔図書〕

- ・『近事画報』（全108号）、解説付き電子復刻版、文生書院、2023年度刊行予定（監修、解説）
- ・HMCブックレット（第56回HMCオープンセミナー、第91回HMCオープンセミナーの内容をもとに刊行予定）

〔雑誌論文〕

〔学会発表〕

- ・メディア史研究会2021年11月例会（2021年11月27日、オンライン開催）
- ・「座談会記事再考——明治末期から昭和初期の雑誌における談話体記事」〔関連研究の発表〕

概要：昭和初期（1920年代後半～1930年代）に流行した座談会記事は、従来、ラジオの座談会番組の後に『文藝春秋』で創造され出版の大衆化の中で各誌に波及したもの、または、文芸誌における合評会の発展形として語られてきた。しかし、当時の出版物を調査すると、「様々な話題に関する複数人の会話の採録」という意味での座談会記事の流行の発端は、ラジオ放送開始前1920年代前半の婦人雑誌において確認できることが分かる。本発表はこの事実確認を端緒として、座談会記事の源流を明治末期以降婦人雑誌や大衆的な雑誌において発達した談話体を用いた諸記事ジャンルに見出し、その特徴および可能性と限界について再考、あわせて、1930年代当時、座談会記事が大衆的な編集手法としてみなされ、婦人雑誌と結び付けられて批判されていた意味についても考察した。